

十二月八日

不思議な青い星に導かれて

今日 生まれたというあの人を想う。

その夜ほど星がかがやいたことはなかった。

やがて、最初のゆりかごに やさしい光をまとして

わたしたちは ひとりひとり 生まれてきた。

私は、流れていく時のなかについて、

死んでいった人たちがはこんでくるメロディに

心を奪われていた。

遠ざかる やさしいまなざしは、

強く生きよと、言っているけれど、

泣きながら顔をうずめた、

あなたのエプロンのおいを

わたしは忘れることはできない。

ああ、おろかな私たちは、自らを破滅へと導き、

ふたたび滅びるまで繰り返す。

その夜ほど星がかがやいたことはなかった。

やがて、最初のゆりかごに やさしい光をまとい

わたしたちは ひとりひとり 生まれてきた。

何千年前から同じように

谷の向こうにゆっくりと沈んでいく
オレンジ色の太陽を眺め

女神が連れてくるという夜の月をまっていた。

神殿の石のむくもりは、ただひたすら与えるだけの愛
のように優しかったけれど、

私は、いつのまにか、あなたからのそんな愛情を
こばみはじめたんだ。

ああ、おろかな私たちは、自らを破滅へと導き、

ふたたび滅びるまで繰り返す。

この乾いた時の中で

願うこと

もう一度あなたの歌う予守唄の中で眠りたい

あの時の夜ほど 星はかがやいてはいないけど

2013.12.08

